

節用集終焉期の諸相

— 明治期点描 —

Aspects of the End of Setsuyoshu in the Meiji Period

佐藤貴裕¹

SATO Takahiro²

[キーワード: Keyword]

辞書史、国語史、近世節用集、国語辞典、五十音、イロハ

[所属 Institution]

岐阜大学教育学部 (Faculty of Education³, Gifu University)

【要 旨 Abstract】近世に盛行した節用集は、明治前半に流布の頂点をきわめるも、その後半には急速に刊行数を減らしていく。こうした時期には注目すべき事象——たとえば、近世節用集への回帰、近代辞書に見る早引節用集の影響、刊行手法の交代、イロハ順・五十音順の錯綜など——が認められる。それらは個別の事象とも捉えられるが、節用集終焉期を象徴する事象としてまとめ上げられる可能性もある。本稿は、それらを整理することにより、中世後半から続く節用集史のまっただけの記述のための準備とするものである。

はじめに

節用集が、明治期に盛行しつつも急速に衰退する過程では、興味深い事象を見ることができ。検索法は、江戸期からの余勢をかってイロハ・仮名数検索（仮名書き一字目のイロハ分類を、仮名字数で下位分類するもの）を採る早引節用集一辺倒となり、室町期からのイロハ・意義検索は過去のものとなる。印刷状態も銅版などへの移行が顕著になるが、木版による刊行も見られないではなかった。明治後半にあっても、節用集の特徴を色濃く残す辞書類も認められるところである。

こうした諸事象の交錯を辞書史の襲として注目することで、単に刊行数の多寡だけに依るのではない豊かな記述的研究をめざすべく、事象の整理を試みることにした。

第一節 近世節用集への思慕・回顧

〔一〕近世節用集を書写する

明治期には近代的な国語辞典の登場という辞書史上の大きな変化があった。節用集もその影響を受ける一方、内容・形式・印刷技術などでの新旧交代があった。そうしたなか、過去のものとなりゆく近世節用集への回顧や思慕の念の存在を感じさせる事例も認められる。

一つは、ネット・オークションで購入した写本である。これは、底本を『倭節用集悉改囊』（安永五（一七七六）年刊）とし、巻頭付録はそれのおおむねを書写、節用集の辞書本体については、上欄（頭書）は省略するものの、本文全体を書写するものである。

末尾近くに次のような識語がある。

此節用集内ノ大字ヲ写シタルハ明治三拾有七辰年新曆十月廿日ヨリ筆動二係リ

其ヨリ寸時余暇ヲ以テ写シ居タリシニ明治三十有九年九月六日ニ至リ遂ニ大字ノ部方ノミヲ写シ終リタリ。都合二十一月十一日ノ長キ日月ニ亘リタリ千秋万歳楽

「大字ヲ写シ」とは、大振りの字で示される辞書本文を中心に写したということであろう。細字による振り仮名などで丁寧に書写するので、「大字」の語義も柔軟に採っておきたい。細字を用いがちな付録の多くを省略したことも同時に含意しよう。

この識語には、二年におよぶ書写を成しとげた感慨が現れているが、何ゆえ書写するにいたったかについて具体的には記されていない。単に漢字・言葉を知るための学習目的とも考えられないではないが、「寸時余暇」との表現からすると大人の所為と思える。ならばなおのこと、書写の動機に興味をおぼえるところではある。

あるいは、明治期の節用集は、イロハ・仮名数検素の早引節用集であり、日用教養付録も乏しいものだったが、『倭節用集悉改囊』は、早引節用集以前からのイロハ・意義検素で、挿絵入り付録も豊富なタイプの節用集である。明治の後半であれば珍奇

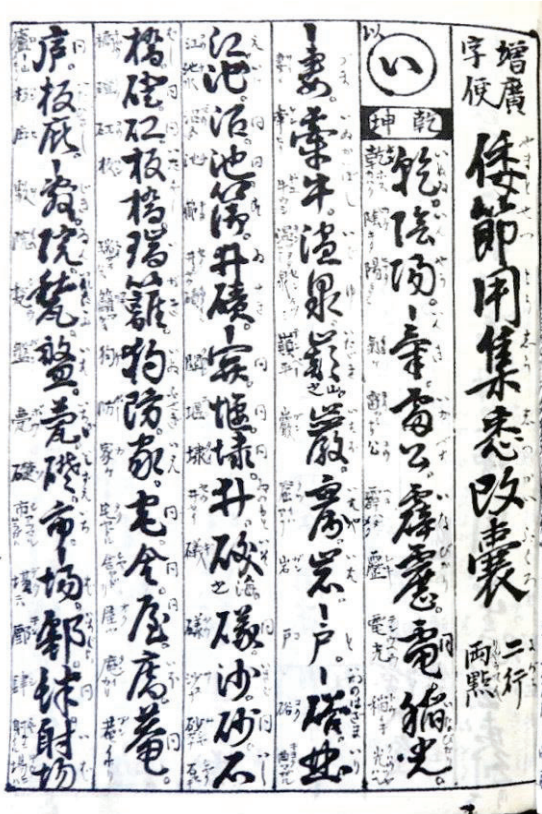


図1 架蔵本

な存在とも見え、好奇心が生まれることは容易に想像されよう。

書写の動機は確定しがたく、これ以上の言及は無為なことだが、このような写本の存することを後考のために記しておくこととする。

(二) 近世節用集を受け継ぐ

もう一つの例は、石川県小松市立図書館の所蔵する『倭節用集悉改大全』（文政九（一八二六）年刊）である。一九世紀になると、辞書本文・付録とも大幅に増補した節用集が企画・刊行されるが、本書もその一つである。表紙の芯紙を薄茶地の布（麻か）で包むため、本体と合わせた厚みで存在感が強調されて豪華だが、長年の使用を考慮して、本体の厚みに負けないだけの耐久性を表紙に与えたものでもあろう。

刊記の裏面には「加賀小松／福岡屋源右衛門」との書き入れがあり、小松市内で伝存されてきたことが知られる。同じく見開きの左半、つまり裏表紙見返しには、別途、貼付された書き入れがある。各行とも同一人の手に見えるが、墨付きのありようや、用いた筆の違いもあるように見えるので、異なる時期に記したことがうかがえる。

◎近年本書譲受渡の事（譲字は／で墨消）

明治二十二年 蘆城上級小学校 朝井市松（福岡）

明治三十六年 県立小松農学校 奥田金松（福岡）

大正二年 蘆城小学校高等科 福岡孝二

昭和二年 蘆城小学校高等科 朝井壽吉（福岡）

昭和十九年 県立小松工業学校 福岡源二

昭和三十三年 小松実業高等学校 朝井壽一

貸出覚えの類であろうが、年記のインターバルを見ると一一年から一七年となるので、一定の年齢に達した折りに貸与して、卒業などの節目で返却させたのもあろうか（なお「福岡」は押印代わりに記したもののように）。「受渡」とあることに注意すれば、この六人のあいだで手渡されていったのもあろう。朝井姓が三人、福岡姓が二人であることからすると、実子や親戚筋の子弟たちでもあろうか。

奥田金松のみ例外となるが、同名の者が日本獣医史学会編（二〇〇七）『日本獣医学人名事典』に立項される。同書によれば、明治一八年（一八八五）年三月一日、

石川県能美郡小松町字松任町の生まれ、学歴としては「明治32年(1899)3月小松町蘆城尋常高等小学校卒業、同年4月石川県立農学校獣医学科入学、明治35年(1902)4月同校獣医学科卒業」と記載され、「貸出覚え」中の地名・学校名があるので、同一人と思われる。ただ「明治37年(1904)5月石川県立農学校助教諭心得、明治38年(1905)7月石川県立農学校助教諭」との記載は「貸出覚え」の「明治三十六年 県立小松農学校」と重ならないが、記載時の都合や記憶違いなどがあつたのもあろう。ともあれ、前途を見込まれる人材に貸し出すこともあつたのであろう。

不明な点もあつて資料価値もないかに見えるが、明治から大正・昭和へ伝えていった事態を考えると、やはり受け継がせたいと思わせる価値を見出したのであろう。それは、先の明治写本の「筆動二係り」「寸暇余暇」「千秋万歳楽」などの表現から感得できる熱意や達成感を醸成するにいたつた何物かと等質かごく近い心情であるように思われる。とはいえ、これらは推測にすぎず、こうした資料が語りかける意義も明らかにしえないが、今は、その指示する方向だけでも汲み取っておきたい。

〔三〕近代における近世節用集の魅力

ところで、明治写本の『倭節用集悉改囊』といい、『倭節用集悉改大全』といい、ともに、イロハ・意義検索の節用集であることは注意されよう。これらの体例は、辞書本文を核として、巻頭・巻末と辞書本文の上欄(頭書)とに挿絵入り付録を組み込んだ、一七世紀末以降の節用集の典型的なものである。一八世紀後半からはイロハ・仮名数検索の早引節用集が徐々に他を圧し、明治期には早引節用集一辺倒になるが、このために、より古いイロハ・意義検索の節用集と明治後半期の人々とのあいだに断絶が生じたと考えられる。であれば、古いタイプの節用集は珍奇なもの、珍重すべきものとして捉えられもしたのであろう。

なお、意義による検索とは語のシニフィエ面によるものなので、古本節用集以来のイロハ・意義検索はシニフィアンとシニフィエとが相交するものとなる。が、早引節用集のイロハ・仮名数検索はシニフィアンのみによる検索法であり、近代的な国語辞典の五十音検索に近いものである。ならば、早引節用集に近代臭を覚えるものがあったり、旧来の意義検索に興味を抱くものもありそうである。多少とも近世の事物に心

当たりのあるものにはノスタルジーに近い感情を覚えさせたことであろう。^(注1)

印刷面にも注意されよう。こまごまとした鉛活字や銅版の書籍に目が慣れた明治期の人々には、木版で、それ故におおらかな書きぶりの近世版本に回顧・憧憬の念を覚えることもあろう。急速な近代化はそうした感情を醸成しやすく、何らかの切っ掛けがあれば、手元に残そうと書写まですることにも得心がいく。「筆動二係り」といった表現からはそうしたニュアンスを嗅ぎとりうるところである。

このように見てくるとき、あるいは渡辺京二(一九九八)『逝きし世の面影』に示されるような数々の近世の事物の一つとして近世節用集(ことにイロハ・意義検索で、日用教養付録を豊富に載せたもの)も位置するように思えてくるが、早計をすべきではなく、その可能性だけを提示するにとどめておく。

第二節 注意される刊行例

〔一〕朝野泰彦編『早引いろは節用大全』

本書、判型は、通常的美濃判半切よりもやや大ぶりの横本である。検索法は、イロハ・仮名数・意義分類の三重検索だが、これは近世後期に先例があり、おそらくは、そのような検索法をもつ一本に増補したものであると思われる。新味としては、さすがに近代的な語を増補することにある。

ただ、口絵こそ銅版の繊細な図が採用されるものの、辞書本文は木版であつて、その丁数も六六五におよぶ大冊であるのは注意される。^(注2)

明治一六年に初版が刊行されるが、このタイミングが興味深い。いまだ近代的な国語辞典は現れていないため、新たな辞書像も示されておらず、大部の辞書の企画・刊行は、旧来の節用集という形でしか実現できなかった時期なのである。他の、たとえ「倭訓栞」「俚言集覽」「雅言集覽」のような語の解説や古典語に重心を置くものは、日常の便に益するところ少ないものでもある。やはり、多くの人が手にしうる辞書としては、節用集以外にはありえなかつた時期なのである。

本書は『日本いろは早引大節用』と改題して、明治二六年に再版されている。いまだ近代的な国語辞典が出揃わなかつた時期だけに再版にも踏み切れたのであろうが、

版元は編者・朝野泰彦(註6)の同族である朝野利兵衛から林平次郎に変わっている。朝野利兵衛が手許不如意になるなどの事情があつて版權を売りに出したのもあろうか。

朝野利兵衛は千葉県佐原の書肆であり、林は東京であるから、人口の多い東京であれば販売の上でも、単に人口が多いということだけでなく、多くの手段・販路を開拓できたのであろう。そうした個別の経緯を考慮せざるをえないが、大部の木版本が再版された点については、その諸側面に注意しておきたい。

あるいは前節で見たような、ある種のノスタルジーを掻き立てる何ごとかが、本書にも認められたといふことであろうか。特に木版による筆勢の再現性は驚くほど自然である。後に、行草書で大書された漢字表記をも近代的な手法で実現したのもも現れるが、どこかきこなく、毛筆による書記の参考にはなりにくいものが少なくないようである。

他に大部の節用集としては『普通伊呂波字引大全』（明治二二年刊。イロハ・仮名数・意義検索。本文五七二丁。一面一〇行。半切横本）がある。『早引いろは節用大全』と同様に、近代的な国語辞典の台頭を考えれば刊行できない規模であり、刊行のタイミングもほぼ同時期である。が、こちらは銅版であつて、まったく同様には考えられない点もある。双方を比較対照することで、印刷技術の点で近世的な木版と近代的な銅版という差の得失なども浮き彫りにできるかもしれない。よりの確に明治期節用集の動態を記述する資料となる可能性もある。今後とも注意しておきたい。



図2 国会図書館デジタルコレクションによる

(一) 銅版節用集の幸運な再生

山田忠雄（一九八一）の口絵では、学校の授与する優等賞・皆勤賞などの賞品として用いられた辞書類を紹介するが、そのなかには長野県授与の『日本いろは新字典』（博文館、明治二七年改題再刊）もふくまれる。本書は、銅版の小振りな節用集で、原題を『（改良早引）いろは新節用』（明治二二年刊）と称したが、売れ行きが芳しくなく、版木市に売りに出されたという（稲岡勝二〇二〇）。

【古板買入】杉の森貸席車屋で、高橋治太郎、東生、筆者、等が主催した古板市に当時未だかけ出し出版屋の大橋新太郎、買物は実に奇抜で枕屋喜兵衛の古板周清外史と云う物五十部許り摺て売れぬもの、此の板木は手車に一台もある程の丁数もの、又丁子屋発行の古板丁数もの其他銅板の字引などを買込み黒人側で驚異の眼で見えて居た、然るに先見の明か幸福か其内の銅板字引が一ヶ月たぬ内に長野県の賞与品に撰ばれ、多部数の注文が入って、黒人が投出した安物の元板を買って利益を得た。雑誌出版で名声を揚げ、出版界の偉人天下の実業家となり現貴族院議員になった人の昔話し。（朝野文三郎一九三七）

明治二一年新刻の銅版の節用集が、六年後には東京の玄人筋からは見放されたといふのがまず興味深い。長野県ではいまだ需要が見込めたようである。書籍の流行なり需要なりの地域差が画然とあつたことにならうか。大書店が全国的な流通経路を展開しても、末端での流通実態はまた別途考慮すべき点があるのではあろう。

あるいはまた、相応の賞品を大量に揃えたい長野県としては、安価なものを採っており、旧版ゆえに価格を抑えられた『日本いろは新字典』ならば、そうした要望にも応じられたという事情もありそうである。もちろん、児童・生徒に無償で与えるものとしては、旧版でも十分な利用価値があつたと考えられる。実際の書記の場面を想起すれば、すべてを明朝体活字だけで表す近代的な辞典類よりも、実際の書体を明示した銅版本の方が歓迎されたとも考えられるのである。

このことは、意外にも重要であつたかもしれない。明朝体を主体とする活字本では、相応の工夫を採られなければ実現できないが、銅版ならば比較的容易に実現でき、磨減が相当に進まないかぎり簡単に摺りだせもするからである。ひいては、実用書体を

示すという特性を放棄しないかぎり、節用集が生きのびる余地はあることになる。先の『早引いろは節用大全』もそうだが、明治期刊の節用集にどのような美質があるかを再確認しておくことは重要である。それを惜しむ者が存在するかぎり唐突な消滅からまぬかれるわけだが、逆に、美質が美質とは受け取られなくなったときに急速に消えていくものと考えられる。このような終焉の構図や仕組みを的確に把握することも、辞書史の記述的研究としては重要な仕事と考えたい。

第三節 早引節用集の残影

(一) 『新式(いろは引)節用辞典』

早引節用集は、近世後半から明治期にかけて広く流布したことから、その影響は多方面にわたり、また根深いものがあると予想しうる。辞書史上に位置づけるにあたっては、その影響を証しうる諸事実を集約することが肝要となる。

たとえば、早引節用集は美濃判半切までの大きさのものが刊行されるが(佐藤二〇〇四)、早引節用集以降のイロハ・意義検索の節用集でも美濃判半切横本を採用ものが現れ、漢字字典や幕末期の英和辞典類にも及ぶこととなった。このようにして美濃判半切横本は、辞書体書籍の象徴的な判型となるが、その背景には早引節用集のおびただしい流布があるものと考えられるのである。

検索法でも似たような影響力を發揮した。近世後期の仮名遣書は、多く語頭の五十音順を採用するのが通例だが、その下位分類は仮名数順であるのが普通である。節用集以外のものに早引節用集の検索法が波及したことが考えられるのである。

明治三八年刊の『新式(いろは引)節用辞典』もそうした例の一つである。全語に語釈と品詞表示がなされることや実用書体を表示しないのは近代的だが、その検索法はイロハ・仮名数検索なのである。ただし、さすがに仮名二字目でもイロハ順を適用するなどの工夫がなされてはいる。

多くの近代な国語辞典が五十音検索に移行していることからすると、「新式」と銘打つ本書がイロハ・仮名数検索を採用した理由には興味注がれるが、まずは、明治末期にあっても早引節用集の影響力が衰えていないことを証するものと考えたい。

(二) 『新式』漢和大辞海

本書は、大正一一年の刊行だが、検索法をめぐって『新式(いろは引)節用辞典』に似る部分もあるので、ここで扱うこととした。

書名からも知られるように本書は漢和辞典のだが、親字の配列が部首別ではなく音読みの五十音順になるものである。さらに独特の工夫も見られる。

検索の如きも、訓読でも、音読でも、字画でも、総画でも、容易に引けるやうになつて居ります。在来の優秀なる辞書でも、訓読索引と音読索引とが別になつて居るのはありません。本辞典は訓読索引と音読索引とが巻頭に、字画索引と総画索引と部首索引とが巻末に在ります。それに訓読索引と音読索引との排列が音より二音、三音、四音、五音、六音とだんぐになつて居りますから、検索が非常に便利であります。(「本辞典の結構」より「検索自在」)

音読索引(親字)・訓読索引(各語単位)の配列法は五十音順だが、「一音より二音、三音、四音、五音、六音とだんぐになつて居ります」という。なにゆえ仮名数検索を介するのか、さらには「非常に便利」と謳うのか不審ではあるが、やはり、早引節用集の仮名数順の軌から逃れられなかった事例として注意しておきたい。

第四節 辞書における五十音順導入の諸相

(一) イロハ順と五十音順

今一度、確認しよう。飛田良文(二〇〇三)によれば、山田忠雄(一九八一下)の付表の「節用集」の項には、イロハ・仮名数検索のもの九六本、イロハ・仮名数・意義検索二一本、五十音順その他三本が存し、「国語辞典」の項では「五年間隔で見ると明治二十六年ごろから五十音順が圧倒的になる。節用集や漢語辞書とは異なる傾向を示す」という。節用集の特徴としてイロハ検索があるとみてよいだろう。

このことは、節用集史の記述にあつては、イロハ順から五十音順への交替の諸相を心得ておく必要があることを示してもよい。イロハ順支持者と五十音順支持者の位相差や、辞書にかぎらず広くイロハ順・五十音順の勢力変化に注意しておくべきだということである。当時、アルファベット順まで視野に入れる見解もあるから、せめて、

イロハ・五十音検索については注意したいということもある。

日本の辞典を用ゆる時に、吾人が毎に其煩はしきに堪へざるは、其索引法なり。従来用ゐられたる索引法は、「いろは」順と五十音なり。而して「いろは」順の索引法は最も煩雜にして、五十音の方はやゝ便なれど、猶ほ常に胸中にアカサタナを繰り返さざる可からず。吾人は絶えず英独仏の辞書を用ゆれど、其索引にさる不便を覚えたることなし。これ一は吾人がいつの間にか此のアルファベット順の索引法に慣れ、「いろは」順又は五十音の方に不熟なるが故に此には不便を感じ、彼には感ぜざるものなるべしと雖も、其主因はアルファベットは二十六字に過ぎざるに五十音又は「いろは」は五十字又は四十八字の多きある故なるべし。字数少きは其順序覚へ易く、多きは覚えがたし。されば吾人は今後の辞典編纂者に、新索引法として、試にアルファベット順を採用せんことを勧む。即ち先づ羅馬字を以て単語を表はし、これに次ぐに仮名と本字と定義解釈とを以てすること猶ほヘボン氏の和英字書の如くなしたらむには如何と思ふなり。邦語の辞典にアルファベット順の索引法を用ゆるは変則なり、されどこれ便利なる変則なり。今や外国語の講修甚だ盛にして、普通の教育ある人はアルファベットと羅馬字の綴り方を心得居らぬは無かるべく、従て此新索引法を便とする者甚だ多かるべき也。

(一)「時文」『青年文』四—四(明治二十九年一月五日発行)。平野清介編(一九八四)『「雑誌集成」森鷗外像』三(明治大正昭和新聞研究会)所掲)

「字数少きは其順序覚へ易く」というのは誤りではないが、現代でもアルファベット順の国語辞典は稀だから、右の見解は妥当ではないことになる。もちろん、日本語の表記に何をどう用いるかについては、個人の教養の傾向や時代の趨勢により変わるものであるから、この「時文」の見解の妥当性を判ずるのは、あまり意味のあることでもなからう。

ただ、この一文では、各検索法への習熟度と教育への目配りがあることは注意すべきである。第五節でも改めて見るように、習熟度と教育とが他の論者によつても採り上げられるからである。とはいえ、「普通の教育ある人はアルファベットと羅馬字の綴り方を心得居らぬは無かるべく」といった状況認識まで肯定しようというのではな

いことを、念のため言い添えておく。

(二)索引(目次)

現代の国語辞典などには表紙見返しに「索引」を備えるが、これは、五十音の各字がどのページから始まるかを示すもので、目次とでも捉えるべきものである。こうした「五十音・いろは索引」の掲載が辞書体裁の定番ようになったのは、それほど古いことではない(石山茂利夫二〇〇四)という。

五十音索引というは索引を載せるスタイルは、落合直文の『ことばの泉』の合本訂正増補版(明治三十三年)あたりかららしい。『言海』も明治三十七年の縮刷版から五十音順索引を、翌年から両索引をつけるようになった。(中略)明治末年から大正期にかけて辞書界を席巻した金沢庄三郎編の『辞林』(明治四〇年)は、五十音索引すら具備していない。これを増補改訂した『広辞林』初版(大正一四年)も初めの刷りのころにはなく、両索引は昭和に入ってから載っている。五十音・いろは索引掲載の形が定着したのは昭和の初めのことなのである。(同)

『ことばの泉』は明治三二—三三年に分冊刊行されるので、明治三十三年に両索引(イロハ索引・五十音索引)を備えるのは機敏といえようが、明治三二—三四年に分冊刊行した『言海』が、縮刷版の刊行される明治三十七年まで索引を付さないのは遅く、『辞林』『広辞林』は遅きにすぎよう。

(三)近世節用集のイロハ索引

実は、節用集では、おそくとも寛文一一(一六七二)年刊の『増補二体節用集』にはイロハ索引が備わる。これ以前の諸本でも、丁付けのないイロハ一覽を冒頭に掲げるのが常態であり、その先蹤は巻末での掲出ながら慶長一五(一六一〇)年刊行の寿閑本『節用集』にまでさかのぼりうる(佐藤二〇〇九)。やがて他の節用集一般が丁付目録を備えるにいたり、近世節用集の典型的な体裁として整備されるのである。

このように索引については節用集の方がはるかに進展していたが、分かりやすさのための工夫は利用者・購買者の拡大を招来する一方、安易・安直との印象も与えかねない。そう考えれば、近代的な国語辞典では、一種の矜持として索引類を付さなかったとまで疑いたくもなってくる。あまりに形式的な判断なので強弁はしないが、近代

的な国語辞典に五十音索引・イロハ索引が掲出されないことと、逆に掲出されるようになることは、ともに節用集の影響によると考えるところがあるのかもしれない。

〔四〕五十音順に導く工夫

ただ、『言海』においても周到に五十音検索を解説するように、さまざまな形で利用者を五十音順に導く工夫はなされている。

『帝国大辞典』（明治二九年刊）では、本文底部見開きを用いて一行一字の縦書き（右横書き）により、五十音を表示している。ヤ行を「やゐゆゑよ」、ワ行を「わいう江を」とするのは不審だが、九八五ページ以降は「やいゆえよ」「わゐうゑを」とする。また、小型の『日本新辞林』（明治三〇年刊）も同様の工夫があるが、ヤ行・ワ行は後者の、穏当なタイプを採っている。

ただ、これらは、単に五十音を掲げたにすぎない。これにしたがってヤ行イ・ワ行ウを本文中に探しても存しないのだから、何とも不親切なことである。

『ことばの泉』（明治三一〜三二年刊）にも同様の工夫があるが、ヤ行は「やゆよ」、ワ行は「わゐゑを」、さらにマ行では「まみむんめも」と表示されており、この本の組織としての五十音順を示すことができているのは注目に値する。きわめて実地的な工夫と



図3 『ことばの泉』国会図書館デジタルコレクションによる

して練り上げられたものとなっている。

第五節 イロハ順を固守する世相 —— 大正期点描補記 ——

〔一〕イロハ・五十音の使い分け

大正期では、明治期後半の趨勢を引き継ぎ、近代的な国語辞典が五十音検索を主とし、イロハ検索の節用集は数を減らしている。しかし、一般社会ではイロハ順を支持する層が分厚く存在していた。明治期でのありようを推測し、的確に把握するために大正期の状況を知っておきたい。

神長倉真民（ジャーナリスト。一八八五〜一九四三）は、事務処理の効率を追求した著作のなかで、五十音順とイロハ順の利用にあつては、社会位相なども考慮して使い分けるべきとした。長らくイロハ順が定着していることがうかがわれるのである。

この優劣を云へばイロハ順はイロハさへ心得て居る人であれば、何人にも繰ることが出来るといふ点に特長がありますが、四十八字あるために、時々順位がわからなくなり、イロハを口の中で繰り返して見ることが多い。之が欠点であります。

五十音の方はアカサタナハマヤラワで行くのですから、順位は比較的早くわかるが、教育のない人には不向きである。イロハは判つても、五十音順のわからぬ人はまだ日本に多いから、何人にも使用せしめねばならぬといふものにはイロハ別でなくては不可ない。併し相当に知識のある人には五十音順がよい。かういふ事になります。（神長倉（一九二四）『執務能率講話』大日本能率研究所）

イロハと五十音の優劣については『言海』『本書編纂ノ大意』の「十」に通じるものであり、それがいまだに通用しているのが注意されよう。

このような判断から、誰しも用いる電話番号簿はイロハ順であるべしと主張することになる。冷静かつ順当な判断であろう。

新聞によれば、電話帳のイロハを止めて、五十音順にするといふ事が出て居りましたが、事実とすれば改悪であります。電話帳は天下万衆の使用するものであります。小僧でもおさんどんでも使用することを考慮の中に入れて考なくては不可ま

せん。事実索引の便利からいふと五十音の方はよいわけですが、電話帳には不向きです。⁽⁸⁾ (同)

神長倉は、「相当に知識のある人」に五十音順がふさわしいとするのだが、実は、まさにその層にもイロハ順支持者が多かったことは次項に示すとおりである。

(二) 現況と趨勢

上田万年(一八六七～一九三七)にも述べるところがある。

是は別の話であります、字引でもさうで、いろは順が宜いか、アイウエオ順が宜いかと云ふ論が帝国大学の食堂で起つて来る。所が慶応年間を以て判断が別になる。慶応以前の人はいろは順が宜い、明治の人間はアイウエオ順が宜いと云ふ、いろは順、アイウエオ順の統計を取つて見るとさう云ふ割になつて居る。電話帳杯はいろは順になつて居りますが、彼れは多分電話帳を作る所の局長さんが古い人であつたからいろは順になつたのでありませうが、(中略)大学杯に於て學術を代表して居る博士連が寄つて議論して見ても、先づ半分位はいろは順の人が居る。停年に近い方がいろは順であるかも知れない。そんな訳でありまして斯う云ふ問題になりますと中々一朝一夕に変へて仕舞ふと云ふことは出来ないのでありますが、併し大勢の赴く所はもう分り切つて居る。今の字引杯でもさうです、総ての目録、索引の如きものはアイウエオ順になつて行くと云ふことはもう明かなことであらうと思ふ。(「大戦後の東洋に於ける国語問題」(講演。末尾に「(校閲を経ず)」とある)。早稲田大学(一九一九)『早稲田叢誌』一)

東京帝国大学の教授陣という、きわめて教養の高い人たちでもイロハ順支持者が少なくないという。こうした事態になる理由を、上田は年齢にあると見ているが、とすればやはり初等教育期に五十音に接したかどうかにかかっているということだろうか。なお、右に中略した部分は次のようである。

今日字引其物を研究して見て多くの言葉の排列を掌つて居る学者の目から見るというは順とアイウエオ順の優劣杯は問題外である。アイウエオ順の方がどの位システマチックで、どの位便利であるか分らないのであります。けれどもさう云ふことを知らない人になるといろは順の方が宜いと云ふが、字引杯で言葉を排列

して行く、例の結付の關係杯を見ると五十音の方が遙に宜い。是は図書館で図書目録を編成する人でも、字引を拵へる人でも、総て斯う云ふ分類の方に携つた人はもう今日論のないことである。(同。「結付」は語義不詳)

ここでは業務経験が問題にされており、実際に五十音順での整理を経験したものが動かしがたい利便性を感じているという。そうした現場での実績が五十音順を支持しているのだが、逆にいえば、実体験という助けがなければ、何ごとかを排列する方法としてまず脳裏に浮かぶのはイロハ順だったということでもある。

(三) 電話番号簿の五十音化

石山(二〇〇四)も注目するように、電話番号簿は大正一四年に五十音順に切り換えられるが、これについても強固な抵抗があつたという。それをいかに乗り切つていったのか。五十音化の経緯について、石山の依拠した『東京の電話』⁽¹⁰⁾と内容ながら、少しばかり早い時期の資料に接したので、そちらから引いてみよう。

b、電話加入者氏名の排列を「五〇音順」とする問題

「いろは順」と「五〇音順」との効率上の利害得失については、学界または世論の確定的な意見は現在、⁽⁹⁾においてもまだ多少の疑問点をも残しているようである。自動交換実施に当つても、省内において「五〇音順」に対し相等的反対意見があつたのであるが、これが解決に最も有力な助言を提供したものは、前述の電話交換能率調査部であつた。(日本電信電話公社(一九五三)『自動電話交換二十五年史』下)

「相当強い反対意見」の内実を把握したいが、いまのところ掘り下げる資料を持たない。先の東京帝国大学での現況からすると、素朴ないし純粹にイロハ順を固守したい運営陣が通信省内にも一定数いたのであろう。また、通信省に電話網拡大の意向があるならば、社会一般での支持状況を考慮するはずで、より支持される側に就くことになるであろう。五十音順への「反対意見」が「相当強い」のも、イロハ順の定着度を実感していたからでもあろう。

さて、ここで注意されるのが電話交換能率調査部との存在である。イロハ・五十音の優劣実験なども行なつたのであろうが、詳細は知られない。関係資料として、寺澤

巖男(一九二〇)「電話交換手能率調査第一回報告書」(逓信省通信局)および通信局電信課(一九二二)「電信吏員心理学実験報告書(第一回報告)」に接することができたが、検索法についての記述は認められなかった。

なお、電話交換能率調査部は、電話番号簿の横書き化にもかかわっていた。

a、電話番号簿を左横書とする問題

電話番号簿は、電話交換事業創始とともに欠くことのできないものであり、電話加入者はもちろんひろし一般大衆に親しまれる出版物である。そのため、交換開始以来一般大衆出版物の例にならつて、右縦書を原則として来たのであるが、こゝにはしなくも自動交換の登場によつて、この大衆的出版物の様式が大障害にぶつかることになった。すなわち、数十年來の右縦書を固執することは効率上もはや許されなくなつたのであつて、この問題は使用効率上次に述べる加入者氏名を五〇音順とすることにも関連するものであるが、要するに当局としては使用効率に重点を置いて、この問題を解決したのである。これについては、当時東京中央局内に臨時に設置されていた「電話交換能率調査部」(主任、文学博士寺沢巖男)の調査研究に待つものが多大であつた。(同)

電話番号簿の改良には、作業効率上の科学的な実験成果を主要な説得材料としたことがうかがわれる。横書き化と五十音化を同時に達成するのは至難であつたろうが、それだけに、一挙に達成に導いた実験・調査の詳細を知りたいところである。前述の関係資料にもその種の記述は存しなかった。ただ、それらでは、労働量と疲労の関係を主たるテーマとし、交換手一人あたりの電話交換本数や接続ミス数、休憩時間などとの関係が調査されている。その一環として五十音化・横書き化についても実験がなされたはずである。なお、自動交換機が導入されたのも大正一五年(昭和元年)からなので、通信省内では、電話交換処理の効率化が最大の課題と認識されていたはずである。そのような状況も手伝つて電話番号簿の五十音化が達成されたのである。

おわりに

明治期らしい、近世と近代が交錯する諸事象を見てきたが、検討については緒につ

いたばかりであつて、手法の洗練をはじめ、今後の進展を待つほかない部分が少なくないと思感するが、多方面からの検討の呼び水となればと思う。とともに、他にも扱うべき事象があるものと思う。教示方をお願いしたい。

また、社会でのイロハ支持層が意外にも強固かつ長い期間にわたつて存していたことが確認できたのは収穫である。辞書の採る検索法と民間の意識とのずれをどのように捉えて辞書史中に位置づけていくのか、大きな課題ができたものと思つている。

注

(1) 石川県立翠星高等学校ホームページによれば、石川県農学校は、明治二九年に小松町に移転、同三四年に県立農学校に改称、同三五年に松任町に移転している。

(2) すでに近世後期、早引節用集が意義検索を用いないのを非難する向きもあつた。

門部ヲ別タズ仮名ノ数ニ依テ字ヲ求ム。世俗珍重シテ便利ト思ヘリ。按ズルニ世ノ人ヲ愚ニスルコトコトニ多シ。某字ハ何ニ属スベキナルヲ取失コト是ヨリ始ル(国会図書館蔵、高井蘭山稿『字貫節用』序)

意義検索の利点を解するものがあることは、ノスタルジーではない経路で、意義検索へのシンパシーを感じるものが一定数いたことを思わせる。

(3) 早引節用集E類諸本のほとんどF類がこの三重検索を採る。

(4) 『いろは節用集大成』(文化一三年序)などE類諸本に通じることが多い。

(5) 近世節用集中、収載語数最多を誇るのは『早引』万代節用集(嘉永三年刊)である。横本で一面七行取り、イロハ・仮名数・意義による三重検索を採るが、丁数は七八二にも及ぶ。その総延べ語数は推計で六・五万語となる。

(6) 『早引いろは節用大全』の刊記には「千葉県平民」とのみ身分を示すが、香取神宮の神官であり、学問所の師匠でもあつた。『開化用文大成』『小学新撰童子通』『小学読本字引』『掌中小学読本字引』『新撰開化用文大成』『新撰名乗字引大成』『千葉県郡治地名箋』『千葉県村名誌』『養蚕手引草』『幼学詩語碎金』などの初學者向けの書籍を一八八〇年前後に著している。朝野雅文(一九九二)を参照。

(7) 「音」とあるので発音単位のように思えるが、仮名書き時の字数である。節用集

の検索法を「発音のイロハ順」とか、仮名数順を「発音数順」などと説明する概説書・事典類が現代でも散見されるが、いかがであろうか。

(8) ただし、『辞林』では、一覽表のごとき「索引」は掲出しませんが、読みから歴史の仮名遣を引く索引などを数十ページにわたって整備しており、利用者の利便性をはかる営為がまったく見られないわけではない。

(9) この直後に「単にひきよといふ点からいふと、英語の力のあるものにはアルハベット順が一番便利です。日本語引にローマ字索引が流行つて来たのを見てはわかりませんが、これには英語の知識……極く初歩でよいのだが……必要でありませうから、広く一般的なものには利用することが出来ない。電話帳に五十音の不向きなと同じ理屈です。」とあり、ローマ字順を最良とするのが注意される。なお、『日本語引にローマ字索引が流行つて来た』との見解は確認することができていない。あるいは名簿・各種索引など小規模のものもふくまれるか。

(10) 日本電信電話公社東京電気通信局編（一九五八）『東京の電話…その五十万加入まで』。

(11) 五十音順といえば国語辞典の語形引き（仮名書き引き）を想起するが、電話番号簿では仮名書き名称を先に立て、漢字書きのものは漢字ごとにまとめて配するのである。「あだち・アダチ」が先に立ち、「安立・安達」は互いに近い位置にあるが、「足立・足達」とは別にまとめられる。ちなみに、金田一京助編『学習国語新辞典』（小学館 一九五八年刊）では、一九八〇年代なかばの版までこの種の五十音順を採るが、漢和辞典としての使い方もできるような目指したのである。なお、仮名書き語と漢字書き語の区別は取り払われている。また、山田忠雄主幹『（音訓両引き）国漢辞典』（三省堂 一九五五年刊）も同趣の五十音順を採るが、漢字表記を持たない語は排除している。一九八五年には『常用国語漢和辞典』（特装版）、一九八七年には『電話帳式に引ける国語・漢和辞典』と称する版も刊行された。

参考文献

- 朝野三文三郎（一九三七）『（明治初年より二十年間）図書と雑誌』洗心堂書塾。磯部敦（二〇一三）『明治前期の本屋覚書き』（金沢文圃園）による
- 朝野雅文（一九九二）『正文堂物語』朝野久子
- 石山茂利夫（二〇〇四）『国語辞書事件簿』草思社
- 稲岡 勝（二〇二〇）『明治の出版と求板本』『書物・出版と社会変容』二四
- 佐藤貴裕（二〇〇四）『早引節用集の危機——明和元年紛議顛末——』『国語語彙史の研究』二三*
- 佐藤貴裕（二〇〇九）『一七世紀節用集における検索補助法』『国語語彙史の研究』二八**
- 二 佐藤貴裕（二〇二二）『節用集終焉期の諸相——大正期点描——』『近代語研究』二二
- 佐藤貴裕（二〇二二）『平成期における節用集認識——隣接分野を中心に——』『国語語彙史の研究』四一（印刷中）
- 飛田良文（二〇〇三）『いろは順から五十音順へ』。飛田良文ほか編『明治期国語辞書大系』別巻、大空社
- 山田忠雄（一九八二）『近代国語辞書の歩み』上下、三省堂
- * 佐藤（二〇一七）『節用集と近世出版』（和泉書院）に改稿再掲
- ** 佐藤（二〇一九）『近世節用集史の研究』（武蔵野書院）に改稿再掲

【付記】本稿は、日本学術振興会・科学研究費基金・基盤研究（C）二〇K〇〇六二七による調査・研究成果を含む。